

震災がれき仮置場火災の消火活動について

仮置場や集積場での廃棄物の保管時に発生した火災を早期に収束させるための、消火活動上の留意点を、以下に示します。

- 蓄熱発火した堆積廃棄物は、内部が広範囲でくん焼（無炎燃焼）している場合が多く、消火活動が長期にわたり、鎮火後も白煙が発生し再び火災に発展する場合が多い。
- がれき内部の焼損箇所は軟弱になっているため、崩落の危険性を常に念頭に置く必要がある。
- 一酸化炭素や硫化水素等の有毒ガスの発生が考えられるため、活動前にガス測定を行うとともに、活動時には空気呼吸器の装着が望ましい。
- 可能なら、燃焼部位を未燃の可燃物から隔離するため、重機で未燃可燃物を移動させ、地盤が露出するまで堆積物に溝を掘り、防火帯（延焼阻止線）を作ることが重要。
- 大量放水は有効。通常の外部からの放水は、内部の構造や状態によっては燃焼部位まで届かないため、堆積物を掘り起こしながら消火する必要がある。
- サーモカメラ（熱画像）は、掘削時に堆積物内部の燃焼部位を見つけるのに役立つ。
- 重機で地面に穴を掘り、水を貯めて、燃焼物を水没させる方法が有効である。搬出した燃焼物を少量ずつ広げて散水する方法もある。
- 風向が一定している現場では、風上から堆積物への空気流入が促進されないように留意する。
- 堆積物の底部や側面に空洞があり、そこからの空気流入が火災の拡大に寄与していると考えられる場合には、土嚢を積み上げて空洞を塞ぐことにより、火勢を弱められる場合がある。側面に砂や土砂をかけることによっても、空気流入を抑えることができる。
- 第二リン酸アンモニウム（リン酸水素二アンモニウム）と界面活性剤の混合水溶液は、再燃防止効果と浸透効果のため、水より高い消火能力が期待できる。（但し、近隣に飲料用の井戸水等の問題がないか、事前に確認する。）アンモニアの臭気や金属の腐食、雑草の繁茂等の影響が後日現れるが、これらの影響を避けたい場合には、界面活性剤水溶液のみでも十分に浸透させれば有効である（タイヤ火災では、これがベストの方法）。薬品処理したがれきは、事後の焼却処分などに手間取ることがある。
- 火災がほぼ鎮圧されたら、堆積物の上部から重機で鉄パイプを打ち込み、熱電対を挿入して内部温度を計測しながら放水を継続すれば、冷却効果と再燃危険の有無を確認できる。但し、重機でがれき上に登る際には、作業範囲を最小限に留めるとともに、鉄板をあらかじめ敷くなど補強を施し、軟弱ながれき上での重機横転等の事故防止を図る。
- 春先や初秋の頃に、同じ堆積物から再び出火する事例が多い。処理の見通しが立たない場合、堆積物を移動させる場所にあらかじめ注水用の配管を敷いておく等の対策が望まれる。